

名誉会員に推挙されて
一終戦後から 10 年間の
土木学会再出発のころを顧みてー

私は、昭和 51 年 5 月 26 日行われた土木学会第 62 回通常総会において、名誉会員として推挙された。私のような全くの民間人として一生を過ごしてきた者にとっては、まことに光栄なことと思ひ、叙勲を受けるよりもっと有難いことと思ひている。私が土木学会の学生会となつたのは大正時代であつたから、今日まで 50 年以上会員として関係している。歴史的に見れば、私たちの先輩には、もっともこの学会に尽瘁された現存の方々もおられるけれども、私も 70 才の年を越したので、長いほうに属する。

私にとって特に土木学会について思い出の深いことは、終戦後の東北支部に関係したところのことである。

昭和 16 年台湾電力(株)が海軍の要請により台湾台中州の大甲溪に、フーバーダムより 10 m 高い世界一の大ダムを築造し、日本一の大発電所を建設する計画の下に、その一端が工事発注された。そして、電力および業界各界から有名人が集まつた。私は鹿島建設の工事の代表者として関係して一部施工したが、この工事は戦争が苛烈をきわめたため中止のやむなきに至り、昭和 21 年引揚げて仙台の鹿島組の支店長に就任した。そのときの土木学会の会長は鹿島組社長の鹿島精一氏であつた。鹿島氏は昭和 21 年から 22 年まで会長をされた。

昭和 21 年夏ごろ、鹿島会長が仙台に来られて私に次のようなことをいわれた。「ご承知のとおり土木学会は日本の土木界の最高の学会である。私は今回はからずもこの学会の会長の名誉を担うことになった。在来、土木学会の会長は、初代古市公威博士をはじめ大学教授ならびに各官公界の重鎮の方々であつた。しかるところ今回終戦となり、時代が変わつたといへば、民間人、特にいわゆる土木請負人の私がこの名門の土木学会の会長に推挙されて会長になつたということは、ひとり私のみならず民間人としてのわれわれにとっても大変名誉なことであり、またその責任の重大なことを認識する次第である。君らも私の意のあるところを汲まれ、現今、敗戦時の苦しい時代ではあるが、大いに力になって貰いたい。このたび私が仙台にきたのも会長として各支部を回り、挨拶をかね大いに学会の振興を図りたいためである。ついで、東北支部の各有力者に集まつていただき総会のようなものを開きたいのでその手配をするように」とのことであつた。私はこの鹿島会長の土木学会に対するお言葉に感激し、さっそく仙台およびその近郊の土木学会の有力者を尋ね回り、約 50 名の方々に面談することができた。それは、その当時およびかつての学会の役員や幹事などをされた有力な方々であつた。

なにぶんにも昭和 21 年のことであるので、50 人分の会席の場所をさがすことも、食料や飲料物を手当てすることもなかなか困難であつたが、ともかく努力の結果、場所も料飲物もようやく整つて、当時としては一大総会を開くことができた。鹿島会長は一同の方々とお話することができたことを非常に喜ばれたが、同時に集まつた仙台地方の方々も大変に感激の面持ちであつた。

私は以来東北支部で幹事役をやり、ときには鹿島建設の事

務所を学会会合時の場所に提供するなどしていささか貢献した。かくして、私は昭和 21 年以来、毎年商議員、常議員、評議員などを約 10 年間つとめ、その後昭和 32 年東京に勤務することとなつた。そして、昭和 33 年と 34 年には、東京で本部理事に推され、学会の基金募集等にいささかつとくした。しかしこの件は、あまりはかばかしく進まないまま今日に至っている。申すまでもなく、例えば土木学会のような公の会には基金も欲しいし、本部の事務所などは、もう少し広い快適な建物をほしいものと思う。世の一般社会を含めた人びとの協力を大いに望むものである。

今回名誉会員になるに及んで、推薦された方々にお礼を申し述べるとともに、第 34 代土木学会長 鹿島精一氏のお言葉を追憶して、この小文を記した次第である。

ちなみに、氏は昭和 21 年 5 月学会長になられ、仙台にこられた後 21 年秋に学会のため大阪方面に行かれ風邪にかかり同 22 年 1 月 4 日東京で入院、同 2 月 6 日に 73 才で逝去された。それより 27 年後の昭和 48 年に間組社長の飯田房太郎氏が第 61 代の土木学会会長に就任された記録が残っている。ご両者とも東大工学部土木科の卒業であつた。

(名誉会員 藤村久四郎・記)

続・生きがい論

“建設業に生きる土木技術者の生活”というテーマで対談を行った。戦前と戦後とは著しい環境の変化のため職業人としての価値観にかなりの相違のみられることが認識された(学会誌 Vol. 61-6 月号参照のこと)。その末尾のほうで、土木技術者としての〈生きがい〉の問題が取り上げられたが、時間切れに終わってしまった。その後も何か物足りなさが残っているので、私の信ずる〈生きがい論〉を補足してみたい。しかし、またしても誌面の制限があるので、結論から書くことにする。人生は生に始まり、死に終わる。だれも生まれ出るとき自分の自分を知らない。だが、死ぬるときには自分の一生のすべてを知っているものは自分以外はない。〈生きがい〉はこの厳肅なべき死の瞬間において、生の総決算として人間の心に浮び上がってくるものではなからうか。“ナムアミダブツ”とか“アーメン”とかを心安らかに唱えて冥目してゆける人は幸福な人のように私には思える。また、自分の人生における〈生きがい〉に満足して死んでゆける人も幸福だと私には思われる。〈生きがい〉の問題は〈自分は人間としてなんのためにこの世に生まれてきたのか〉というような人間の心の問題の一つなのであろう。たしかに、ただ生きていくためには職業という吊革にぶらさがつておれば、その日その日は過ごしてゆける。しかし、人間はパンのみに生きる者ではないだろう。職業はパンの問題であり、〈生きがい〉は心の問題である。両者は次元の異なる世界のものであるが、職業によって生き、同時に職業によって〈生きがい〉が得られるならば、こんな良いことはないではないか。〈生きがい〉を自分の作業に見出し易かつた恵まれた環境の者でも、〈生きがい〉なんかどうでもよいとおっしゃった人もいた。また、現在のように自分の仕事が組織の中の一つの小さい歯車であっても、その仕事に魂を打ち込むことができ、それを愛し、それに楽しみを見出すことができるならば、その人は自分の仕事に〈生きがい〉を感得することができるのではなからうか。〈生きがい〉の問題は時代を超越し、人それぞれが人生問題として取り上げるべき主要課題であらうと思う。〈生きがい〉は、多難の人間の人生から不平不満を除くために神様が人間に与えら

(名譽會員 飯吉精一・記)

(科学技術庁 表彰係長 松永孝義・記)